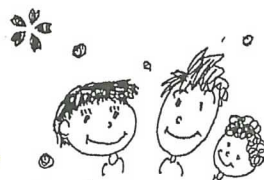


# よりそう

Side by Side



編集担当者 新谷・パコ・筒井

被災者の声 まごころ広場長 白澤良一さん

## 価値観が変わった

### ◆津波が襲った

私の家は大槌町の近くにあった。津波があった時は自宅に居た。目の前に津波が押し寄せて来たので急いで2階に駆け上がった。しかし、2階まで水位が増したので屋根に昇った。家の周りは流されて、家屋や車で囲まれ、2〜3軒離れた家のプロパンガスが爆発し、火事が発生し、私の家の2階に引火し、その火は私の足元にまで及んだ。間もなく家が流された。流されている時に周囲から『助けて!』と叫ぶ声やプロパンガスの爆発する音が聞こえ、さながら地獄の様相であった。私は屋根に上がったまま300m程流されたが、そのままでは焼死すると思い、40〜50m離れた所に鉄骨2階建てのベランダが見えたので、ビニール被膜の電線に掴まりながら移動した。更に30m程離れた所に40代の男性が屋根の上で、笑顔で私の方を向いて手を振っているのが見えた。しかし10数秒後、その場所に目をやった時にはその家の形は無く男性は消えた。

しかし、間もなく津波の第2波が押し寄せ、徐々に水位が増したので、その家の2階の部屋にあったカラーボックスやふとんを積み重ね、頭が天井に届く所まで上がり、素手で天井を叩き空気口を開けた。もうだめかと思ったが、幸いにも顎までの水位の所で止まった。あの40代の男性は死を恐れず既に仏になっていたのでしょうか！私は一人も助けることが出来ず生きている。あの男性の顔はしっかり覚えている。私は生きていて良いのだろうか？これで良いのか？地区の3分の2の人々が亡くなったのだから生きている事の罪悪感さえ覚える。

### ◆再会はまごころを生んだ

私はそこにある避難所にいる。そこへ多田一彦さんが来られ、『あなたが何故ここに・・・?』多田さんとは会議の場で一度だけ会ったことがある。その彼が私たちを助けて下さるといふ。私はこの時に【過去の自分は形あるモノを求めていたが誤りだった。真の価値は形の無いモノの中にあるのだ!】と気が付いた。

多田さんの『まごころ』は私に元気を与え『自分たちで出来ることはする。足りない部分を助けて下さい』と頼んだ。避難所の隣接地を借りて『まごころ広場』を設け避難所の人々の安らぎの場所にした。

### ◆祭りには魂がある

まごころ広場は被災者の憩い・安らぎの場であり復興への足掛かりを創る場所でもある。この地区には伝統文化芸能がある。この祭りは住民の心が1つなる魂のようなものがあり4月にやりたかったが、人々の心はこの災害で閉鎖的になっている。だからこそ白沢鹿子踊をやりたいが3分の2もの仲間を失い物理的には不可能に近い。残された私たちのまごころを繋いで何とか実施したい！この時期にそんな事を言い出すことすら冒険だった。反対意見や批判の声を覚悟で沈んでいる人たちに根気よく話し頼み少数ながら承諾を得てここ『まごころ広場』で開催出来た。祭りには魂があり、踊った人も参加した人も心が1つになって『生きていて良かった』と笑みで浮かべながら口々に語ってくれた。これが復興への歩みになるだろう！

### ◆新遠野物語の原稿も失う

私は柳田國男(1875〜1962)の長男、故・為正氏婦人の富美子さん(91)の第一秘書であり、彼女が来年出版する予定だった『平成の遠野物語』(仮題)の大切な原稿をお預かりしていたが、今回の災害で家屋と共に全部失ってしまった。それをお詫びするために伺った私に富美子先生は『生きていてくれて良かった。原稿はいいのよ!』と言いながらしっかり抱きしめて下さった。生きていることの喜びと大切さをここでも再度確認したのだった。

水野 洋 (前よりそう編集長)



お話を下さった白澤良一さん



## お知らせ

傘の貸し出しを御利用ください。  
水光園と花巻の東和温泉へのツアーが定期的に実施されるようになります。

6/11(土) 天気 曇時々晴

気温 16℃ S 25℃

降水確率 0 S 30%

6/11(土)ボランティアミーティングはPM5:30〜@体育館

6/10(金)の宿泊: 258人, 活動: 182人

まごころ種 募集

くわしくはHPへ